

タイトル	北海学園大学人文学部開設20周年記念シンポジウム記録：人文学の新しい可能性
著者	
引用	北海学園大学人文論集(57)：135-173
発行日	2014-08-31

人文学の新しい可能性

パネリスト 芦名定道氏

(京都大学大学院文学研究科教授)

佐藤弘夫氏

(東北大学大学院文学研究科教授)

テレングト・アイトル氏

(本学人文学部教授)

司会

安酸敏真氏

(本学人文学部教授)

日時

2013 年 5 月 18 日 (土曜日) 午後 2 時 - 5 時

会場

7 号館 D 30 教室

主催

北海学園大学人文学部

共催

北海学園大学大学院文学研究科,

北海学園大学人文学会

現代日本における人文学の課題

—— キリスト教研究の視点から ——

京都大学 芦 名 定 道

1 はじめに

日本の大学を取り巻く状況、日本の現実、大きく動きつつある。この変化を引き起こしている要因について考えるとき、二つの時間スケールを区別することができるように思われる。一つは、日本の近代化というやや

長い時間スケールであり、もう一つは最近の数十年をカバーするより短い時間スケールである。前者は、近代の科学技術や市場原理の導入・進展による国家形成のプロセスとして、明治の富国強兵から現代までを貫いて流れている。また後者は、リーマン・ショックそして東日本大震災などによる激動する状況である。これら二つの時間スケールにおいて進展する変化は、日本の教育を規定する基本的要因であり、双方の要因が合わさるところに、教育の市場化、国際化、そして実学志向が強力な路線として登場することになる。

実際、現在の日本の大学は、こうした変化とそれに対応する路線を先取りするかのように急激な変革を行おうとしている。たとえば、わたくしが所属する京都大学の場合、この数年の間に次々と新しい改革案が提示されている。教養教育・一般教育の半分を英語にする(英語の教員 100 名雇用)、博士課程教育リーディングプログラムの実施、学部を基礎単位とした従来の人事制度と教員組織の改変、事務組織の大規模な集約化など、大学のあらゆるレベル・部門で大きな変化が起きつつある。よくもわるくも、10 年後に、日本の大学は大きく変貌しているのではないか。少なくとも、京都大学の事態はそれを現実のものとして予感させるに十分である。

しかし、このいわゆる「変革」は、だれのために何を目指しているのだろうか。現在の一連の改革が推進されるに先だつ時期に、京都大学では、京都大学連続公開シンポジウム「倫理への問いと大学の使命」(2007 年から 2009 年までに 4 回)が開催され、その報告書が出版された⁽¹⁾。その編者の一人、教育哲学・教育人間学を専門とする矢野智司が、この報告書の序論「倫理への問いと大学の使命」で、次のような議論を行っている。京都大学をはじめ日本の大学は、学生運動の激動のあと、この 30 年余りの間、さまざまな大学改革を行ってきた。その結果何がもたらされたのか。それは、「共同体としての大学の衰弱」である。本来、大学は専門家を育成する「専門家の教育」の場にとどまらない役割を担っている——「共同体の成員としての責任ある市民を育成する」、「共同体の枠組みを超え生命世界に生きる」——。しかし、改革の中心的ターゲットとされた「教養教育」とは、「市民

の教育」と「人間の教育」という異なる 2 つの次元の教育につながっている」(矢野, 2010, ii) ものであったにもかかわらず、改革によって、このつながりは大きく損なわれることになった。というのも、この間の「改革」には、「理想主義やヒューマニズムに代わる教養教育の理念がなかった」(同書, iii) からである。その結果、「大学は資金というレベルにとどまらず、組織運営から教員管理に至るまで市場経済に組み込まれつつある」(同書, iv)。現在進行中の大学改革は、ここで批判的に論じられた過去の改革を、その検証もなしに、さらに促進するものとなっていないだろうか。そこでは、「市場交換に還元できない「研究」と「教育」, 「真理への献身」(同所) は二次的なもの、改革を妨げるものとされ、「次の世代に無償に「教える」という贈与のリレーが継承されていく」(同書, v) という教育の理念は今や解体されようとしている。市場原理に一面的に規定された等価交換としての教育改革は、教育を崩壊させるものとして作用することになるだろう⁽²⁾。

この日本の状況下で、人文学はいかなる役割を担っているのか、人文学はいかなる課題に直面しているのか。哲学、歴史、文学の諸学科から構成される伝統的な人文学は、教養市民社会から大衆社会への変動の中で——これは先の長い時間スケールの中にある——、自らの内からいかなる新しい在り方(＝新人文主義)を構築すべきであろうか。これが、本日のシンポジウムで、わたくしが論じたいテーマである。もちろん、わたくしがここで論じる得る事柄はきわめて限定された範囲のものに過ぎないが、新人文主義に求められているのが、伝統・伝承の保存と現代への批判的視点(危機を批判的に分析すること)の提供という二つの課題であり、しかもこれら二つの課題は相互に関連し合っていることについて、わたくしの専門であるキリスト教研究を交えつつ考えてみたい。

2 伝統の変容と再建

すでに指摘したように、日本社会は大きな変動の中にある。東日本大震

災などによって短い時間スケールで急激に顕在化し加速化しつつある現実
は、より長い時間スケールの中で準備されてきたものであり、この事態を
宗教という観点から見る場合、特に顕著なこととして、死をめぐる儀礼シ
ステムが十分に機能できない状況が指摘できる。大量の死、戦場と化した
安置所、葬儀も火葬も間に合わないためにともかくも土葬という最悪の状
況下で、東日本大震災がもたらしたのは、多くの人々が、家族や身近な人
の死を受け止めることができないという現実だったのある⁽³⁾。

宗教的伝統は、死者儀礼、すなわち身近な人の死を了解する上で中心的
な役割を果たしてきた儀式・技法を伝承してきたわけであるが、この技法
は近代化の中でしだいにその意味が了解困難になり本来の機能を喪失する
傾向に陥った。現代社会は死を病院内に隔離し日常から遠ざけてきたが、
同時にそれは死と向き合い、それに対処する知恵をも失わせたものではな
かったか。近代化のプロセスが引き起こした伝統の変容は、コミュニティー
の崩壊や知的世界の解体をも伴いつつ、進展してきたのであって、この実
態は、東日本大震災によって改めて浮き彫りにされたように思われる。

これは、日本に限ったことではなく、東アジア全体に見られる共通の動
向である。長い歴史の中で形成され存続してきた死者儀礼の変容は、それ
を支えてきた宗教文化・家族形態の変貌を意味している。韓国は儒教的な
死者儀礼が宗教文化の基盤を形作り、土葬を基調とした社会であったが、
この30年の間に土葬から火葬への急激な変化が生じている⁽⁴⁾。この変化が
何を帰結することになるかを現時点で見通すことはできないものの、死の
了解が困難なところでは生の了解もおそらく困難になるのではないだろう
か。そして日本では、東日本大震災以前から無縁社会として問題化してい
た事態が、さらに深刻なものとなりつつあるのである。以上の状況につい
ては、死あるいは死後について伝統的な宗教文化が伝承してきた言葉――
「天国」あるいは「地獄」など――が、そしてこの言葉が表現してきた死の
問いと生の問いとが、いまだその形式を残しつつも、実質においては空転
しつつある、とまとめることができるだろう。

もちろん、近代化が引き起こした伝統の変容は、日本や東アジアにはじ

まったことではない。近代化の震源地である西欧社会はこの変容をいち早く体験していたのである。この近代以降のキリスト教的な宗教文化に生じた変容について、宗教哲学者またキリスト教神学者であるジョン・ヒック (1922-2012 年) は、次のように指摘している⁽⁵⁾。

「基本的にキリスト教は、天国、または地獄経由の天国における未来の復活の生命を断言する。そして時には地獄の辺土、また現代では地獄に代わる絶滅が、これに加わる」(ヒック, 2011, 219), 「しかし近代世界では、それでもっとも保守的なキリスト教徒を除けば、永遠の地獄は神話のなかに消え失せている。天国も同様に消え去っている。もはや天使たちが神の玉座の前で讃美歌を歌うことはない。」(同書, 220)

近代は、伝統を掘り崩しつつここまで突き進んできた。形骸化したとは言え、伝統が文化内部で保持されているかぎりにおいて、問題は顕在化せずに済んでいた。しかし、事態の進展が一線を越えるとき、一挙に問題は顕在化せざるを得ない。大抵の現代人は個人のレベルでは死の意味も生の意味も十分に支えきれないにもかかわらず、これまで人々の生死の了解の支えであった伝統的な儀礼・技法は崩壊し、新しい技法はいまだ出現していない。この事態に直面して、人文学はいかなる役割を果たし得るか。人文学のなし得ることは、生と死をめぐる伝統的知恵を保存し、現代社会の批判を通して、現代人の意味世界——生と死を含め自らの存在を了解しその意味を実感できる世界——の再構築の助けとなる知恵を指し示すことなのである。

人文学の内部からこのような問題意識はすでに形を取り始めている。たとえば、東日本大震災に少し先だって、10 年ほど前から、東京大学の 21 世紀 COE において死生学が取り上げられたことなどから始まった、死生学 (thanatology) の新しいうねりが、大きな広がりを見せている——歴史学から学際的な研究へ——⁽⁶⁾。また、死と生の現実に対して、宗教文化の基盤に立って正面から向き合おうとする動きは、東日本大震災との関わりにお

いて、たとえば、東北大学の文学研究科実践宗教学寄附講座における「臨床宗教師」の育成の試みとなって現れている⁽⁷⁾。

3 人文学の役割

次に、以上見た現代世界の変貌とそれに応じた人文学の変化について、わたくしの専門領域に引き寄せて考えることによって、変化する世界のなかにおける人文学の役割について、さらに議論を進めることにしよう。

京都大学の「キリスト教学」は、伝統的な人文学の学問の枠組みの中で、キリスト教を専門的に研究教育する講座として発足し、現在に至っている。しかし、キリスト教学とは、神学と哲学を有する伝統的な西欧の大学・学問システムとはややずれた性格を有しており——境界領域・中間分野という言うべきものであり、武藤一雄の言い方を借りれば、「神学と宗教哲学との間」の学科と表現できる——、発足当初より、その学問的位置づけをめぐることは多くの議論がなされてきた⁽⁸⁾。

特にこの10年間の京都大学キリスト教学の動向で顕著なことの一つは、東アジアを中心とした地域からの留学生の増加——大学院の半分近くが留学生であり、その点では文科省的には優等生的と言えるだろうか——であり、それに応じて、キリスト教学の教育と研究において、日本・東アジアの比重が従来よりも増大しつつある。実は、これは京都大学また京都大学文学研究科自体が採用しつつある方向性にほかならない。日本・アジアのキリスト教へと研究対象領域を拡張する試みは、キリスト教学における新人文主義と言えるかもしれない。わたくし自身、日本キリスト教思想について講義を行い、論文を執筆する機会が大幅に増えている。この観点から、人文学の役割を考えるための材料を取り上げたい。

日本におけるプロテスタント宣教からすでに150年が経過し、太平洋戦争の敗戦後から数えてもほぼ70年が過ぎた⁽⁹⁾。この時間的プロセスの中で、昭和初期から太平洋戦争期の困難な時代の資料が散逸し忘却されつつある。現在は、あの時代の日本キリスト教に関わる歴史的事実や歴史的証

言を保存する上で、ぎりぎりの時点にある。同じことは、東日本大震災における津波と原発事故の記憶に関しても起きる可能性がある⁽¹⁰⁾。これに、ヒロシマ・ナガサキ、沖縄、そして従軍慰安婦を加えることができるだろう。人類の貴重で忘れてはならない経験を、歴史として保存し伝承するには多大な努力が必要であり、この生きられた歴史の保持には、過去への批判的視点が要求される——過去は決して美しいだけではなくしばしば愚かで悲惨である——。そして、それは現代への批判とならざるを得ない。過去を解体し忘却しようとする現代とは何か。震災という天災を原発事故というさらに悲惨な人災としたものは何であったのか。こうした問いを突き詰めて考えるには、現代の日本社会を規定する科学技術あるいは現代の大学改革を推進する市場原理を一度突き放し対象化する必要がある——もちろん、これは容易なことではない——。ともかくも、記憶の忘却に抗しつつ記憶を保持し共有する試みは、まさに人文学にこそ課せられた課題であって、日本のキリスト教研究には、近代日本におけるキリスト教の記憶を保存しつつ、明治以来の日本の近代化をキリスト教の視点から東アジアの文脈において描くことが求められている。この点で、キリスト教研究は人文学的課題の一端を担うものなのである。

近代化が伝統的な宗教文化を変容させたことは、先に述べた通りであるが、近代化は決して否定的にのみ捉えられるべきものではない。近代化が人類に与えた恩恵は、医療と教育という分野に限ってみても否定できないであろう。中世の西欧世界に大学という制度が出現する以前に、修道院が、知の拠点として存在し、知識の収集と保存に貢献したことはよく知られたところであるが、近代化は、修道院から大学へと引き継がれたこの知の集積保存という役割を、特権的な人々の手から大衆とでも言うべき無数の人々に向けて解放した。この延長線上にあって、現代の IT 技術は大学また人文学がこの役割を新しい形において遂行する可能性を開きつつある。たとえば、大学でも、IT 技術を用いて、知のグローバルなネットワークとローカルなネットワークとの両者の結節点として機能することが可能となっており、これは開かれた大学（大学図書館）の構想と呼ぶことができるかも

しれない。こうした仕方においてこそ、大学は、世界の中の大学(国際化)と地域の中の大学(地域化)という二つの社会的要請に応えることができるのではないだろうか。

さらに注目すべきは、出版・流通の簡易化・容易化による知の共有と創造性の促進であり、ここにもIT技術が関わっている。従来、大学あるいは研究者は、知(研究成果など)の発信を行う際に、紙の書籍を出版社を通して刊行し、紙の雑誌に論文を投稿してきた。しかし、この形態は人文学においても大きく変化しつつある。わたくしの所属する京都大学キリスト教学研究室では2012年度から研究室紀要を刊行しているが、それは電子ジャーナルという形を取っている。その利点は、小さな研究室の予算でも、またそれほど大きな労力をかけることなく、雑誌が刊行できることにある。これは、わたくしの学生時代には考えられなかったことであるが、このようにして、大学の知的発信力は飛躍的な向上が可能になった——学術リポジトリを持つ大学はすでに一定の数に上っている——。ここで問われているのは、大学は現代の新たな知的環境の中でなおも真に知のセンターたり得るかということなのである。

以上の点から、キリスト教との関係で興味深い試みとしてあげられるのは、活動を開始してからすでに数年になる、オンライン神学図書館「GlobeTheoLib」である⁽¹¹⁾。これは、世界教会協議会(WCC)とグローバルネットワーク(Globethics.net)——スイスのジュネーヴに拠点を置く——とが、さまざまな専門家、組織、個人による倫理的視点や洞察の共有を促進することを目指して開設したものであるが、キリスト教的知の新しい形を示唆するものと言える。こうした動向の背後にあるのは、科学技術者を含めた知の専門家における自らの営みの社会的責任の自覚とでも呼ぶべきものである。たとえば、東日本大震災以降、地震防災の専門家においては、きわめて稀なリスクに対しても人々に知らせる必要があるとの意識が高まってきている。この責任性の自覚に呼応して、人文学には、記憶・保存から分析へ、そして分析に基づく文化と社会への知の発信——社会批判を含む——へとその営みを大きく展開するという課題が課せられているの

である。

以上の人文学に課せられた課題に取り組む際に、人文学の中でも哲学は独自の役割を担っている。科学技術者における自らの社会的責任の自覚については、先に指摘したことであるが、イタリアの哲学者ジャンニ・ヴァッティモによれば⁽¹²⁾、この点については科学技術自体に哲学的要素が内在していることに注目しなければならない。たとえば、この哲学的要素として挙げられるのは、社会的責任とも緊密に結びついた民主主義との関わりである。

「西洋ではテクノロジーの発達はデモクラシーの発達と分かちがたく結びついていて。ところが日本人が電子工学技術を自分のものにながらデモクラシーは自分のものになかったとしよう。そのときには本来の意味での哲学的な問題が提起されるのである。」(ヴァッティモ, 2011, 124)

このような観点で捉えられた科学技術は、狭義のいわゆる理系的な営みではなく、いわば、知をめぐる民主主義や社会的責任、そして人権といった諸要素をも包括した統一的な文明・文化の問題に属しているのである。この統一的な文明における科学技術の意味を批判的に論じるのが、まさに哲学の役割である。哲学は、批判的知の伝統の中心をなしてきた点で、人文学の中でも特異な位置を占めていると言わねばならない。そして人文学全体に対しても、科学技術に内在する哲学的要素を主題化し自覚可能な仕方を取り出しそれを保持するのに寄与するように求められている。なぜなら、こうした科学技術の批判的理解は、特定の学科としての哲学の課題というよりも、人文学全体が共有する哲学的要素によって果たされるべきものだからである。

4 おわりに

現代日本の状況は大きく変化しつつある。明治以来の貴重な遺産である

人権思想や民主主義がいわば自明性を失いその基盤が解体しつつある現在、人文学はいかなる方向性を模索してゆくべきなのか。もっぱら教養市民に向けて定位していた近代西欧の古典的な人文主義からの転換も必要ではないか。大学の大衆化は⁽¹³⁾、その問題点を批判的に捉えつつも、その積極的な意味について正当に評価すべきであろう。

しかし、新しい人文主義・新人文主義への期待、人文学が担うべき役割は、消費社会の等価交換を超えた大きさと意味を有している。この点で、大学は営利を追求する企業とは別の原理に立っているのであり、人文学の動向はこの大学の教育・研究の固有性をめぐる焦点の一つとなり得るものなのである。現在の日本の大学と人文学的教育の現状を見れば、多くの課題や難問が山積しているが、こうした時代にこそ、まさに新しい人文学には大胆に発言することが求められているのではないだろうか⁽¹⁴⁾。

注

- (1) このシンポジウムは4回にわたり開催されたが、4回のそれぞれの内容が、次の報告書に、「第1部 専門家としての倫理」、「第2部 生命倫理とケアの教育と実践」、「第3部 研究の自由と倫理」、「第4部 教養教育と倫理の形成」として収録されている。位田隆一・片井修・水谷雅彦・矢野智司編『倫理への問いと大学の使命』京都大学出版会、2010年。
- (2) 内田樹『下流志向——学ばない子どもたち/働かない若者たち』（講談社、2009年）において展開された議論は、この教育と等価交換の関係に関わっている。内田は、現代日本における教育の現状を、今の日本の子どもたちは全世界的な水準から見てもっとも勉強しない集団である（「勉強を嫌悪する日本の子ども」）と捉えた上で、この原因として、子どもたちが「経済合理性」という判断基準に基づいて「教育」を「等価交換のサービス」と捉え始めている点を指摘している。現代日本の教育改革が、教育とは教師が学生に与えるサービス（苦勞することなしに得られる即効的な効果・結果）であることをいわば前提にして進められるとき、それは教育自体の自己解体を帰結することになる。
- (3) 東日本大震災後の被災地の状況とその中で奮闘した宗教者の姿については、たとえば、次の文献を参照。北村敏泰『苦縁——東日本大震災/寄り添う

宗教者たち』徳間書店、2013 年。しかし、この大震災がもたらした現実はこの数年に取まらないより長い時間スケールの中にある。北村は次のように指摘している。

「震災前にも各地で NHK の放送番組で年間 3 万人とされた「孤立死」があり、自死、子供の虐待死が相次ぎ、貧困や残虐な犯罪の現場で、終末期医療、生殖医療といった生命倫理が問われる現場で、「いのち」の揺らぎが見られた。そして、それらに自らの存在の意義をかけて取り組んだ宗教者たちがおり、彼らはこの震災でも当然のように行動を起こした。野宿者支援に携わっていた牧師は「震災で社会全体が『ホームレス』状態になった」と被災者に伴走した」（北村、2013、7）。

- (4) 韓国における死者儀礼の変容については、次の拙論を参照。芦名定道「韓国キリスト教の死者儀礼」（『東アジアの死者の行方と葬儀』勉誠出版、2009 年、96-104 頁）。
- (5) 本稿におけるジョン・ヒックからの引用は、『人はいかに神と出会うか——宗教多元主義から脳科学への応答』（法蔵館、2011 年）から行われる。この文献において、ヒックは、「天国と地獄はなぜ、ここでもまたもっとも保守的な者を除けば、キリスト教徒の想像力に基づいた支持を失くしてしまっているのだろうか」（ヒック、2011、221）という問題を提起し、その上で、「死後はどうなるのか」を正面から論じている。このヒックの指摘は近代化が伝統宗教にもたらした影響という観点から論じることが可能であるが、キリスト教に関しては、キリスト教が本来現世中心的である点——大林浩『死と永遠の生命——そのキリスト教的理解と歴史的背景』（ヨルダン社、1994 年）を参照——をさらに考慮した分析が必要だろう。
- (6) この東京大学の 21 世紀 COE は、その後グローバル COE プログラム「死生学の展開と組織化」（<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/>）に引き継がれた。こうして提起された死生学という問題意識は、「日本臨床死生学会」（<http://www.jsct.org/>）や「ルーテル学院大学大学院附属・包括的臨床死生学研究所」（<http://www.luther.ac.jp/guide/affiliate/thanatology/>）といった広がり示している。
- (7) この東北大学の「実践宗教学寄付講座」については、次のサイトを参照いただきたい。<http://www.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/top.html>。このサイトのフロントページでは、この寄付講座について、次のように説明されている。
「実践宗教学寄付講座は、2011 年 3 月の東日本大震災以来、被災者の心のケアのために地元の宗教者、医療者、研究者が連携して行ってきた「心の相

談室」の活動を踏まえて設立されたものです。今回、東北の被災地では、宗教者による支援活動が活発に行われました。それぞれの宗教の立場をこえて連携し、支援活動が行われてきたことが一つの要因であると考えられます。その上で、さまざまな信仰を持つ人々の宗教的ニーズに適切にこたえることのできる人材が必要なのではないかという洞察が生まれました。この講座は、そのような専門職（仮に「臨床宗教師」と呼んでいます）の育成を行うために、地元の宗教界などの支援を受けて設立されました。」

- (8) 京都大学のキリスト教学講座あるいはキリスト教学については、次の拙論を参照。芦名定道「キリスト教学の理念とその諸問題」（日本基督教学会北海道支部『「キリスト教学」再考』（日本基督教学会北海道支部公開シンポジウムの記録）、2009年、52-71頁）、「キリスト教学の可能性——伝統とポストモダンとの間で」（日本基督教学会『日本の神学』49、2010年、252-256頁）。
- (9) 明治以来、宣教150年を迎える日本キリスト教の通史的な研究としては、次のものが代表的である。海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』（日本基督教団出版局、1970年）、土肥昭夫『日本プロテスタントキリスト教史』（新教出版社、1980年）。また、この150周年を記念して刊行された文献としては、日本基督教団日本伝道150年記念行事準備委員会編『キリストこそ我が救い——日本伝道150年の歩み』（日本基督教団出版局、2009年）が出版されている。
- (10) 2013年5月15日のNHKのクローズアップ現代では、岩手県の大槌町役場（津波による大被害）の保存をめぐる問題が取りあげられた。何をどのように保存すべきかについての合意形成には、単年度単位での予算の消化に縛られた行政的発想や等価交換の発想では決定的な限界があることが示唆された。
- (11) オンライン神学図書館「GlobeTheoLib」については、<http://www.globethics.net/gtl>を参照いただきたい。ここでは、次のような説明がなされている。

GlobeTheoLib is the first project worldwide to address strategically the challenge of a more balanced theological knowledge transfer between churches and institutions of theological education in the North and South, East and West, and to provide a common platform for existing digital resources and theological libraries in the world.

GlobeTheoLib is for:

Individual users, theological researchers, educators and students (who can

up-load/download full-text sources)

Theological libraries (facilities for specialized theological collections)

Associations of theological libraries (a common global platform)

Associations of theological schools (Masters and doctoral dissertations and theses; e-courses)

Churches and specialized ministries (strengthening common research)

Content providers (wider spectrum of users)

Regional ecumenical organizations and Christian World Communions (documentation of ecumenical archives).

- (12) 本稿でのジャンニ・ヴァッティモ (Gianni Vattimo, 1936-) からの引用は、『哲学者の使命と責任』(法政大学出版局, 2011 年)から行われる。ヴァッティモは、現代イタリアを代表する哲学者の一人であり、ガダマーから受け継いだ解釈学的哲学の立場に立って「弱い思考」を論じ、キリスト教に関しても積極的な論を展開している(芦名定道「現代思想と〈神〉の問い——ティリッヒからジジエクまで」, 理想社『理想』No.688, 2012 年, 40-52 頁, を参照)。またヴァッティモは、ヨーロッパ議会の議員を務めるなど、政治にも積極的に関与している。
- (13) これはおそらく世界的規模で生じている動きと思われるが、近現代日本における動向については、竹内洋『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』(中公新書, 2003 年)などで論じられている。
- (14) 新しい人文主義を展望するには、人文主義の中心的基盤である大学の歴史と現状とを視野に入れることが必要になるが、その際に参照できる文献は現在着実に増加しつつある。たとえば、最近のものとして、次の文献が挙げられる。江島尚俊・三浦周・松野智章編(大正大学総合佛教研究所「大学と宗教」研究会)『近代日本の大学と宗教』(シリーズ 大学と宗教 I) 法蔵館, 2014 年。三宅義和・居神浩・遠藤竜馬・松本恵美・近藤剛・畑秀和『大学教育の変貌を考える』ミネルヴァ書房, 2014 年。

シンポジウム「人文学の新しい可能性」

神・人・死者 ― 日本列島における多文化共生の伝統

佐藤 弘 夫

1 はじめに

過激なナショナリズムの高揚にみられるように、いま世界中で近代の矛盾が一気に噴き出している。東日本大震災とそれに続く原子力発電所の事故もまた、現代社会のあり方を根底から問い直す出来事となった。科学技術と生産力の発展によって、かつてないほど多くの人々が情報や物質面での恩恵を受けられるようになる一方、そこから疎外された人間との間に生じる差別や不公平はますます拡大しつつある。

また、医療技術の進歩は日本に世界一の長寿社会をもたらしたが、長い老後をいかに充実したものとするかという問いに対する解答までは用意してくれなかった。晩年にどのような生活を送るべきか、超高齢化社会のもとでだれが介護を担当するのか、そしてだれもが避けることのできない死の瞬間をいかにして迎えるか、私たちはこれらの難問を抱えて、まだ暗中模索を続けている段階なのである。

この発題では日本列島を素材として、古代以来の長いスパンのなかで、「世界」の構成員として人間のみが突出する近代の異形性を指摘するとともに、「新人文主義」の問題提起を受け、より豊かな生を可能にする融和と共存の新時代構築に向けて、人文学が果たしうる可能性について考えてみたい。

2 空間を分かち合う人とカミ

私たちが通常「世界」や「社会」という表現を使用するとき、その構成員としてイメージするのは当然のことながら人間である。しかし、時代を近代以前にまで遡ったとき、神や仏や死者（ご先祖様）もまた、私たちとともにこの世界の構成者だった。かつて人々はこれらの超越的存在＝カミの眼差しを感じ、その声を聞きながら日々の生活を営んでいた。

人類が過去どの時点でカミの存在を認識したのかという問題は、これまでも宗教学や人類学、認知考古学などの諸分野で議論されてきたが、いまだ結論が出るには至っていない。しかし、この地球上において、宗教をもたない民族や種族が時代・地域を問わず皆無だったことはまぎれもない事実である。人間とはその本質においてカミを必要とする存在なのであり、カミは国家の誕生に先行してその姿をあらわにしていたのである。

カミは個人的な信仰のレベルで受容されただけではない。前近代社会では、共同体の営みを円滑に進める上でもカミは欠くべからざる存在だった。定期的に行われる法会や祭祀は、参加者の人間関係を再確認し、そのつながりを強化する役割を担った。祭礼という大きな目的に向けての長い準備期間のなかで、人々は同じ集団に帰属していることが決して偶然ではないことを自覚し、自分たちをここに居合わせるようにしむけたカミのために、協力して一つの仕事を成し遂げる重要性を認識していくのである。

私がまだ小学生だった昭和三〇年代は、東北の農村ではまだ集落ごとにあった神社の祭りが生活の節目になっていた。私が住んでいた村でも、最大の神社である鹿島社の祭礼の日には小学校は午後から休校になった。祭りのために長い時間をかけた準備が進められ、周辺の道路は整備されて掃き清められた。

いま村を訪れると、ほとんどの神社は訪れる人もないまま荒れ果ててしまっている。神社を巡る参道は、かつては子供たちの通学などにも使われる公共の生活道路としての役割を果たしていた。他人のために体を使うこ

とを嫌う人間も、神仏のためなら積極的に社会活動に参加した。その活動が、毛細管のごとき末端の道路や橋を維持する機能を果たしていた。しかし、神が公共空間を創り出す機能を失ったとき、自発的にそれを整備しようとする人はいなくなって、道は草に埋もれてしまうのである。

自分たちの周囲を振り返ってみればわかるように、人間の作り上げる集団はそれがいかに小さなものであっても、その内部に感情的な軋轢や利害関係の対立を発生させることを宿命としている。宗教的な儀礼は、構成員の視線を超越的存在へと向けさせる契機となった。共同体の人々はカミという第三者へのまなざしを共有することによって、構成員同士が直接向き合うことによるストレスと緊張感を和らげようとしたのである。

3 緩衝材としてのカミ

そうした役割を果たした儀礼の代表的なものとして、起請文の作成がある。起請文とは、ある人物ないしは集団がみずからの宣誓の真实性を証明するために、それを神仏に誓った文書であり、中世を中心に膨大な数が作製された。起請文の末尾には監視者として神仏が勧請され、起請破りの際にはそれらの罰が身に降りかかる旨が明記された。

だれかを裁かなければならなくなったとき、人々はその役割を超越的存在に委ねることによって、人が人を処罰することにもなう罪悪感と、罰した側の人間に向けられる怨念の循環を断ち切ろうとした。カミによって立ち上げられた公共の空間は、羊水のように集団に帰属する人々を穏やかに包み込み、人間同士が直にぶつかりあうことを防ぐ緩衝材の役割を果たしていたのである。

カミが緩衝材の機能を果たしていたのは、人と人の間だけではなく。集団同士の対立が極限まで強まると、人はその仲裁をカミに委ねた。前近代の日本列島では、村の境界や日照りの際の川からの取水方法をめぐって共同体間でしばしば紛争が生じ、死傷者が出ることも珍しいことではなかった。その対立が抜き差しならないレベルにまで高まったときに行われ

たものが、神判とよばれる神意を問う行為である。

神判の代表的なものに、盟神探湯(くがたち)がある。これは熱湯のなかに手を入れてなかの小石などを拾わせるものであり、対立する双方の共同体から代表者を選出し、負傷の程度の軽い方を勝ちとした。両者に焼けた鉄の棒を握らせるという方法もあった。勝利した側に神の意思があるとされ、敗者側もその裁定に異議を差し挟むことは許されなかった。

また、前近代の日本列島では、境界の山や未開の野にはカミが棲むと考えられており、そこに立ち入ったり狩を行ったりするときには土地のカミに許可をえなければならなかった。かつて猟師の世界では、狩りのために山に立ち入るにあたって数々の儀礼を行うことが不可欠とされてきた。また山中でも、言動をめぐって多くのタブーが存在した。その背景には、人の住まない山は神の支配する領域であり、狩りという行為は神の支配下にある動物を分けていただくものという認識があった。そのため、獲りの対象は必要最小限に留め、獲物のいかなる部位も決して無駄にしないように努めなければならなかった。それが資源を保護し、獲物をめぐる集団同士の衝突を防止する役割を担った。

それは海峡を隔てた国々の中間地帯についても同様だった。朝鮮半島との間に浮かぶ無人島の沖ノ島は、五世紀以来の長期にわたる祭祀の跡が残されている。日本から朝鮮半島と大陸に渡ろうとする航海者たちは、この島に降り立って、その先の航海の無事を神に祈った。島も大海原も、その本源的な支配者は神であると信じられていた。かつて辺境の島々はその領有を争う場所ではなく、身を清めて航海の無事を静かにカミに祈る場所だったのである。

だが、近代に向けて世俗化の進行とカミの世界の縮小は、そうしたカミ一人の関係の継続を許さなかった。人の世界からは神や仏だけでなく、死者も動物も植物も排除され、特権的存在としての人間同士が鋭く対峙しあう社会が出現した。人間中心主義としてのヒューマニズムを土台とする、近代社会の誕生である。

それは私たちが生きる世界から、人間間、集団間、国家間の隙間を埋め

ていた緩衝材が失われてしまったことを意味した。体に棘をはやした人間が狭い箱に隙間なく詰め込まれ、少しの身動きがすぐさま他者を傷つけるような時代が幕を開けた。カミが支配した山や大海や荒野に人間の支配の手が伸び、分割され目にみえない国境線が引かれて、寸尺の土地、狭小な無人島をめぐる醜悪な争いが勃発するのである。

4 重なり合う生と死の世界

これまでみてきたような、人間を包み込むカミの存在を前提とする前近代の世界観は、そこに生きる人々の死生観をも規定していた。

今日私たちは、「何時何分御臨終」という言葉に示されるように、生と死のあいだに明確な一線を引くことができると考えている。死の判定は専門家のあいだでも議論のある難しい問題だが、それでも大方の人はある一瞬を境にして、生者が死者の世界に移行するというイメージを抱いている。しかし、私たちが常識と思っているこうした死の理解は、人類の長い歴史のなかでみれば、近現代に特徴的なきわめて特殊な感覚だった。

前近代の社会では生と死のあいだに、時間的にも空間的にも、ある幅をもった中間領域を認めることが普通だった。その領域の幅は時代と地域によって違ったが、時間でいえば数日から一〇日ぐらいの間に設定されていた。呼吸が停止しても、即座に死と認定されることはなかった。その人は亡くなったのではない。生と死のあいだに横たわる境界をさまよっていると考えられたのである。

その間に残された者たちがどのような行動をとるかは、背景となる文化によってさまざまだった。日本列島についていえば、生者と死者の世界が連続しているという感覚の強かった古代では、遊離魂を体内に呼び戻すことによって死者を蘇生させようとする試みがなされた。不可視の理想世界(浄土)のリアリティが社会に共有される中世になると、死者を確実に浄土に送り出すことを目的とした追善の儀礼が行われた。死者が遠くに去ることなく、いつまでも墓場に住むという感覚が強まる近世では、亡者が現生

で身にまとった怒りや怨念を振り捨て、穏やかな祖霊へと上昇していくことを後押しするための供養が中心となった。

前近代の社会では、生と死が交わる領域は呼吸が停止してからの限られた期間ではなかった。生前から、死後の世界へ向う助走ともいえるべき諸儀礼が営まれる一方、死が確定して以降、長期にわたって追善供養が続けられることも決して珍しいことではなかった。前者の例として、一〇世紀後半に比叡山で組織された二十五三昧会（にじゅうござんまいえ）がある。この会は浄土往生をめざす有志による結社である。そこでは、普段から臨終に備えての準備が進められるとともに、メンバーが死去するにあたって、尊厳をもって死を迎えるための看取りと葬儀の作法が詳細に定められている。後者の例としては、江戸時代に広く営まれるようになった、七七（しちしち）日から三十三年・五十年に至る追善法要がある。

柳田国男が論じたように、死者の霊は長い期間を経て浄化されながらしだいに個性を失い、やがては祖霊と一体化すると信じられた。生と死のあいだに一定の幅があるだけでなく、その前後に生者の世界と死者の世界が重なり合う長い期間があるというのが、前近代の人々の一般的な感覚だった。生者と死者は、交流を続けながら同じ空間を共有していた。生と死そのものが、決して本質的に異なる状態とは考えられていなかったのである。

こうした前近代の死生観と対比したとき、近代が、生と死のあいだに厳密で越えられない一線を引くことによって、生者の世界から死を完全に排除しようとする時代であることが理解できるであろう。いまの日本では死は周到に隠ぺいされ、だれもが死ぬという当たり前の事実すら公然と口にするのはタブーとされている。いったん人が死の世界に足を踏み入れてしまえば、慌ただしい形式的な葬儀を終えて、親族はただちに日常生活に戻ってしまう。別世界の住人であるがゆえに、死者はもはや対等の会話の相手ではなく、一方的な追憶と供養の対象にしか過ぎないのである。

かつて人々は死後も縁者と長い交流を継続した。それは、自分自身もいつかは墓のなかから子孫の行く末を見守り、お盆には懐かしい家に帰って

くつろぐことができるという感覚の共有にほかならなかった。死後も縁者と交歓できるという安心感が社会のすみずみまで行き渡ることによって、人は死の恐怖を乗り越えることが可能となった。そこでは死はすべての終焉ではなく、生者と死者との新しい関係の始まりだった。

しかし、近代では、人間の生はこの世だけで完結するものであり、ひとたび死の世界に足を踏み入れてしまえば二度とわが家に帰ることはできなかった。死はどこまでも暗い孤独の世界だった。死が未知の暗黒世界であるゆえに、近代人は生死の一線を越えることを極度に恐れるようになった。いまの日本人が生質を問うことなく、一分一秒でも長い命の継続を至上視する背景には、こうした近代固有の死生観があるのである。

5 異形の時代としての近代

これまで述べてきたように、私たちがいま住んでいる社会の特色は、この世界から人間以外の神・仏・死者などを〈他者〉として放逐してしまったところに求めることができる。

中世でも近世でも、人と死者は密接な交渉をたもっていた。神仏もはるかに身近な存在だった。そこでは人間だけではなく、神・仏・死者・先祖などの不可視の存在＝カミすべてを含めた形で、この世界が成り立っていると考えられていた。カミはときには人間以上に重要な役割を果たす、不可欠の構成員だった。そうした時代の方が、人類の歴史のなかでは圧倒的に長い期間を占めていたのである。

ヨーロッパ世界から始まる近代化の波動は、この世界から神や仏や死者を追放するとともに、特権的存在としての人間をクローズアップしようとする動きだった。これは基本的人権や自由・平等の観念を人々に植え付け、人間の地位を向上させる上できわめて重要な変化だった。近代に確立する人間中心主義としてのヒューマンイズムが、人権の確立に大きな役割を果たしたことは疑問の余地がない。

しかし、他方でこの変動は深刻な問題を惹き起こすことになった。カミが

公共空間を生み出す機能を停止したことともなう、人間・集団間の緩衝材の消失であり、死後世界との断絶だった。その結果、絶海の無人島の領有をめぐって、お互いに顔を合わせたこともない国民レベルで敵意が沸騰する、異常としかいいようのない時代が到来した。また、かつてのように親族が重篤者を取り囲んで、その穏やかな臨終と死後の救済を祈る光景は姿を消し、病院でたくさんのコードによって生命維持装置につながれた患者が、本人の意思にかかわりなく生かされ続けるような姿が常態化することになったのである。

前近代人が共有していた、この世界の根源には民族や人種を超えたカミが実在し、すべての人間はその懷に柔らかに包み込まれているという安心感は、ナショナリズムや選民意識の肥大化を抑制し、死の恐怖を和らげる機能を果たしていた。カミに対する心を澄ました祈りは、邪悪で卑小な存在としての自己を実感させた。死者や動植物に対する小さなさやきの言葉には、周囲の人間に向ける穏やかな眼差しに通ずるものがあつた。

それらを他者として社会から締め出し終えたとき、人間のエゴと欲望は抑制する枠を失って、際限のない暴走を開始することになったのである。

6 人類が直面する課題と人文学の可能性

宗教が一面で支配と収奪を正当化する役割を果たしてきた歴史は忘れてはならない。カミの名のもとに、膨大な数の人々が惨殺されてきた。その愚行はいまも続いている。だがその一方で、カミの名のもとに公共空間が立ち上げられ、神事や祭事を通じて人々が階層を越えて交流し語り合う場が設けられた。道路や橋・広場など公共の施設の整備と補修も行われてきた。

岩手県の三陸沿岸には数百に及ぶ神楽、鹿踊り、剣舞などの民俗芸能を伝える団体があつたが、その多くが三月十一日の津波によって甚大な被害を受けた。本格的な復興の着手に先駆けて、多くの地域で神事と祭礼が再開された。被災地再建に向けて、人々の心の支えとして祭礼が位置づけら

れていった。未曾有の災禍に直面して、神事が単なる民俗芸能としての役割を超えて、新たに人々を結びつける絆となっている。各地で神が新たな公共の空間を作り出しているのである。

近代がカミを社会から締め出した時代だといっても、欧米の先進国に較べれば、日本列島にはまだ身近なそこかしこにカミの影を見出すことができる。東日本を中心に各地に残されている草木供養塔は、山仕事を行う人々が伐採した草木を供養するために建立したものであり、針供養の行事などとともに人間と草木・無生物を同レベルの存在として把握しようとする日本人の発想を反映する現象である。また、医学部などで盛んに建てられている実験動物の供養碑は、最近でこそ韓国などでもみられるようになったが、これもまたすぐれて日本的な習慣だった。

息の詰まるような人間関係の緩衝材として、新たにカミを生み出そうとする動きも盛んである。今日、日本列島を席卷しているゆるキャラブームは、その代表的なケースであると私は考えている。飼育されている膨大な数のペットもまた、ぎすぎすした人間関係の緩衝材としての役割を担うものであった。

世界の各地でみられる宗教原理主義への回帰は、西欧流の近代化への反発という要素が大きい。妖精が舞い、動植物が語るファンタジーには、近代以前の世界に対する欧米人の郷愁を読み取ることができる。だが、こうしたさまざまな動きにも関わらず、世界的なレベルで続いている世俗化の奔流に抗うことは決して容易ではない。

今日の日本でも、大方の人間はもはや絶対的な根源神の实在を信じてその救済の摂理に身をゆだねることはできない。時間に追われる日々では、死者との穏やかな共存の時代を再現することも不可能である。しかし、そうした時代がかつて实在したことを認識することによって、みずからの立脚する地平を客観視することはできる。

いま私たちは、かつて近代の草創期に思想家たちが思い描いたような、直線的な進化の果てに生み出された理想社会に生きているのではない。近代化は人類にかつてない繁栄をもたらす一方で、人間の心と私たちを取り

巻く精神世界に、昔の人が想像もしえなかったような無機質な領域を創り出してしまった。今日顕著になっているナショナリズムや民族差別、さらには科学技術が生み出す諸問題も、根源の要因はこの部分にあると私は考えている。

私たち人文学の研究者は世界と日本の社会が直面する現今の危機に対して、即効性のある提言をすることはできない。しかし、長い人類の歴史に照らして近代社会のいびつさを指摘することによって、現代がどのような時代であり、目の前に立ちはだかる諸問題がなにに由来するものであるかを、もっとも根底的なレベルで考察するための素材を提供することはできる。そのことによって、人類の歩みを緩やかにし、その方向を少しだけ修正させることはできる。

人類の知恵を蓄積してきた人文学がいますべき仕事はまさにそれであり、「新人文主義」を提言された意図の一つもそこにあると私自身は受け止めた。この問題について、今後とも、ぜひ継続して議論を深めていくことを願っている。

近現代並びにグローバルな時代における 文学の変化と応答

(本原稿は2013年5月18日、「北海学園大学人文学創立20周年記念シンポジウム」
における講演に加筆したもの)

テレングト・アイトル 2014年6月20日

それでは、文学はどうでしょうか。人文学としての文学は、どのように近代の急激な変化に応答してきたのでしょうか。あるいはわれわれにどういう恩恵をもたらし、その効果は何でしょうか。また、どうして現代の合理化された社会において、われわれはまだ文学や芸術に煩わされなければなりませんか。

実際、グローバリゼーションが進んでいる今日、これらの問いかけは、おそらくますます切実な問題として、現に、いまわれわれの前に立ちはだかっているかと思います。

近現代の見地からみると、人々にとって和歌や俳句、あるいは五言七律の漢詩、シェークスピアの戯曲、フローベール、トルストイ、夏目漱石、村上春樹の小説を文学だといっております。しかも細かくジャンルに分けて、趣味・好みとして扱うようになり、あるいは文学を人間の現実生活を反映する鏡だとか、社会が必要とするエンターテインメントだとか、人間の内面世界を豊かにする宝庫だとか、あるいはもっぱらそれを芸術的な言葉の一種だといい、もしくは読者・消費者のための嗜好品など、さまざまな見地から定義を下したりしているが、一様には言えません。

しかし最も古典的な考えに従っていうと、人間とは、理性と感情という両方の組成によって支えられているもので、文学とは、いわば人間の感情・情緒を扱った総合的な分野になるわけです。それは子供の感性を磨いたり、民族集団の運営のあり方に参与したり、あるいは個人の心のあり方を左右

することから、人間一般の幸福感を決定することまでにかかわる分野だと認知してきたわけです。そして、文学作品は喜怒哀楽の感情の知識の源泉だとされ、それをフィクションとして楽しみながら、そこには常に真理・真実が含有され、教育・教訓・道徳的な意味があると見做してきました。約 2,500 年前、孔子の編纂した『詩経』の目的とその扱い方はそうだったし、紀元前 5 世紀、プラトンの『国家』などにおける対話もそうでした。そして約 1,100 年前から『古今和歌集』においても日本はそれに近い考えを打ち出していたわけです。言い換えれば、文学とは人間の喜怒哀楽・感情の秩序立ったストーリーで、それは理性的な思考と相反して、人間の感情・情緒から構成されたもので、人間の感情がそれなりに自律して、グラマティックにまたはシステムテックに語られたものだと考えていました。その効果は人々の美意識・感受性を左右し、倫理道徳、生き方ないし幸福感にも影響を与え、人間にとって不可欠な、総合的な領域だと考えていたわけです。

そういった古来の感情システムとしての文学が、もしわれわれの基本的な美意識、喜怒哀楽、感情の扱い方の基礎を形作ったものだとするならば、日本の感情システムとしての文学は、実際、その形成のプロセスにおいて、何回も大きな変化を辿ってきたと言えます。そのなか、いうまでもなく、大陸渡来を除けば、最大の変化をもたらしたのは、明治期の西洋受容です。

明治期の西洋受容とは、いわばそれまで中国から受容したものを和文脈において独特な文学を育んできた古来の日本文学が、明治時代、急激に欧米のシステムを導入して、いわゆる和漢洋を混合して、さらに大きなかつ急激な変貌を成し遂げていくということでした。そして、その当時の最終的な目的とは、いわば近代化、西洋化、合理化という社会的ないし人々の内的な世界までも進化し、発展するのだと考えていたわけです。

それでは、日本において、日本的、あるいは東洋的感情システムには、欧米の感情システムを導入することによって、どのようにシステマティックに刷新されてきたのか、どのように文学の近代化を進めてきたのか。それについては、明治初期の翻訳文学、政治文学、新体詩、戯作文学と、その後

一連の文学作品をみればわかると思いますが、どれ一つとっても、それまでの伝統的な文学とは違って、そこには和漢洋の感情システムが互いにつかり合い、刺激しあい、吸収しあって、新しい文学の感情システムに塗り替えられていく実例を見ることができます。

ここでその具体的な文学作品を例にして分析するよりも、もっと簡明な指標として、おそらく明治前後の教育システム、あるいは基礎教養、感情の育成にかかわる教科書を概観した方が、わかりやすいかと思います。

江戸末期まで、主な教育は、主として藩校、寺小屋、私塾で行われ、教科科目と教科書は、大よそ中国古典教養システムを基礎と背景にして施されていました。例えば、『孝経』、『唐詩選』、四書（『大学』『論語』『孟子』『中庸』）、五経（『詩経』『書経』『春秋』『礼記』『易経』）、『史記』、『漢書』、『大日本史』、『日本外史』などがありましたが、そのなか、『唐詩選』、『詩経』、『史記』は文学、感情教育に分類されます。しかし、明治維新以降、打って変わって、例えば「開成学校（東京大学の前身）」（1874）の教科科目は、「語学」、「数学」、「歴史」、「物理学」、「博物史」、「経済学」、「羅匈語」（ラテン語）というように刷新されていきます。そのなか、「語学」科目には「文典（西欧古典）、修辞（レトリック）、英文学、英作文」があり、「歴史」には「万国史、英国及植民地歴史、合衆国史、仏蘭西及日耳曼歴史、開化史」があり、「羅匈語」という科目には「文典及英文の反譯」があります。

のちに、文学教育において、1877年に発足した東京大学の文学部には、第一科（史学、哲学、政治学）、第二科（和漢文学科〈英文学、和文学、漢文学〉）があり、1886年に発足した帝国大学の文科大学には、哲学・和文学・漢文学・博言学があり、その後また史学、英文学、独逸文学科も設立するようになります（ここで、とくに注目したいのは、「和文学」という科目の誕生と、その科目において、すでに『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』、『源氏物語』などが教科書として採用されていたことです）。

ここからみてわかるように、明治初期、たった10何年間の間、東洋古典基礎教養が急速に欧米の教育のシステム、あるいは構造的なカリキュラム

にとって変わり、刷新され、そのなか、東洋の在来の教育・思考・文学の喜怒哀楽のシステムが欧米のシステムにシフトされ、再編成され、西洋化されていったことです。

もちろん、中国においても、20 世紀初期、日本の明治初期と同じような教育改革がありましたが、しかし儒教的な伝統への擁護と批判というような激しい政治的、社会的な衝突が発生し、「文学革命」の運動が起こったのです。その延長上に、中国共産党がマルキシズムを導入して、それが内戦まで発展し、古い儒教の教養システムが徐々に刷新されるようになり、感情システムのシフトにおいて、大きな犠牲を払ってきたわけです。

実際、この東西二つのシステムは、当時はもちろんのこと、現在ですら根本のところにおいて互いに融合しがたく、競合しているところがあると思います。

そして、中国と違って、日本におけるその競合と矛盾は、明治期まず文学の礎となる言語において発生し、衝突していました。その衝突とジレンマに応答するため、民間からまず、言語改革に乗り出し、言語の近代化を進めます。例えば、「漢字御廃止之議」(1866)、「修国語論」(1869)、「日本語廃止・英語採用論」(1872)、「文法会」(1877)、「かなのとも」(1882)、「羅馬字会」(1885)、「言文一致」(1886)などさまざまな提案とグループが現われ、欧米言語をいかに日本に導入するかが喫緊の課題としていました。非常に象徴的な例として、当時最もラディカルな雑誌『明六雑誌』(1874)は、その第一号の冒頭において、言語の問題を取り上げ、そこには西周の「洋字を以て国語を書するの論」と、西村茂樹の「開化の度に因て改文字を発すべきの論」というエッセイが掲載されていました。

こういった言語の急激な近代化・合理化は当時、ほとんど混乱といってもいいぐらいの言語状況をもたらし、それによって美意識・感情の世界も混乱していたことが文学作品で現われてきます。そして文学の翻訳と創作において、翻訳文体、直訳体、漢文直訳体、漢文体、和文体、文語文体、雅文体、雅俗折衷体、言文一致体、口語体など多様な文体がほぼ同時代に世に主張され、かつ使われるようになります。

まさにこの文体・美意識・感情システムの混乱のさなか、そのなかで勉強して育ったのは、尾崎紅葉、幸田露伴、坪内逍遙、森鷗外、島崎藤村、北村透谷、与謝野晶子、樋口一葉、夏目漱石、永井荷風、上田敏、北原白秋、石川啄木など一連の明治と明治以降の文学者たちです。彼らは和文・漢文と欧文において、それぞれ違った教養・造詣をもち、また違った感情・情緒の世界・文学に精通していました。そしてそれぞれ違う読者層をリードしながら、それぞれ違う和漢洋の趣向から作品を創作し、互いに競争し、刺激し、また批評・批判し合って、次から次へとそれまでなかった新鮮な作品を生み出し、文学の近代化を押し進めていきます。そのなか、新しい文学思潮・流派・スタイルが生み出され、例えば、写実主義、ロマン主義、写生文、自然主義、耽美主義、などのように展開していきます。

こういった急激な近代化、西欧化の流れのなか、社会的、日常的な生活までも、合理化が進むようになります。もちろん、その全体の背景には、自然科学に基づいた進化論の思想、諸イデオロギーに基づいた社会科学の思想があったことを忘れてはなりません。しかし、日本は幸いに、中国やフランスと同じような、大きな社会的な紛争、内戦はなかったのです。どちらかという、比較的スムーズに移行し、口語体に基づいた近代文学が形成されるようになってきたと言えます。

称賛をこめていえば、東洋は西洋の文学を受容することによって、東洋側はより豊かな感情・感性をもつようになってきたと言えます。しかし冷静に考えれば、明治以来、東洋約 3,000 年、日本約 1,300 年の文学の感情システムが、急激に変化し、それまでは、なかった文学観に直面させられ、チャレンジさせられ、さらには悩まされてきたわけです。東西が融合してから、伝統的な感情システムが塗り替えられただけでなく、さらにまた新しく構築させられることに強いられてきたわけです。

かくして、日本語の文体は、目まぐるしく変容を経て、大正以降、現在まで比較的安定してきたと言えますが、しかし、周知のように、近代化、西欧化のなか、日本文学において、目立った一つの傾向は、写実主義、「没理想主義」、自然主義、私小説、個人心境小説などのような流れの文学が重

んじられ、それに対して、ロマン主義、耽美主義、超現実主義（いわゆるシュールレアリズム）などのような、イメージネーション、想像力を重んじる文学が疎かにされるようにしてきた傾向があります。そういった傾向について、明治期の鴎外、北村透谷、石川啄木たちは、すでに強く批判し、指摘していました。

しかし福沢諭吉を始めとする「実学主義」という基本指針が明治から背景にあったこと、また、言語が急速に改革されたのが原因で、写実主義、実用主義が優先されてきた風潮は避けられなかったかもしれません。（その一方、いうまでもなく、日本文学は社会性や政治性から縁遠い存在で、万葉文学の誕生のときから社会的、政治的理念にはほとんど無関心であったことも事実です）。

現在、とりわけ文学教育・研究の分野において、イメージネーション、創造力よりも、リアルな模写、客観描写、事実の所在を求めるような教育が主流となり、客観性、実証性、文献蒐集、記録整理、分類保存が王道となっています。したがって、文学の解釈、鑑賞、批評、理論の研究は、ほとんどと言っていいぐらい事実確認、因果関係の証明、作品と現実との照合・実証のみに終わってしまう傾向があります。そして現在、日本文学だけではなく、歴史、思想と哲学までも、多くの研究は、ただ一つだけの方法、いわゆるほとんど実証主義のみです。文学教育ないし人文学部は、むしろ単なる論理的思考の訓練の場とされ、事実・実証を確認する教育の場として、あるいは写実・模倣・リアリティを求める唯一の物差しを呈示する機関として機能するようになってきました。

その結果として、この想像力の働きを抑制し、観察の結果を重視するという、科学主義的、客観主義的な方に偏った教育と研究は、実は、見事に近代化、合理化、高度管理社会をサポートする方に導き、想像力を育むという文学の本来の目的・役割に相反する傾向が強くなり、矛盾を抱えるようになっていきます。

とりわけ、この過去約 40 年間の間、現代化・合理化が進み、徐々にではありますが、日本にとって、欧米はすでに他人事ではなくなってきました。

そして高度に管理化された社会が形成されてくるにつれて、文学教育は、理性と論理性の名のもとで内面世界・感情・精神世界までも論理的に説明されるようになり、実証主義によって検証されるのが通常となっています。

古典的な意味において言えば、これは一種の理性と感情のバランスが崩れた現象で、感情システムの教育までも、理性を働かせ、イメージネーション、創造力を抑制しようとする方に傾いてきたということでしょう。

一方、現代社会は、人間の内面世界、精神世界には、大きな不安定をもたらしてきました。その傍ら、人々は不安定さを、さらなる合理的な諸治療方法を施して治そうと努力しています。いわゆる社会的、心理学的に基づいたカウンセリング・心理療法など、理性的、論理的な治療手段に頼るようになっていきます。もちろん、これは何も、日本だけで起こっていることではありません。すべての先進国において見られる共通の現象です。

実際の例として、現に、京都大学保健診療所神経学科を訪れる学生数が増え、年間診療学生延べ人数は1973年の931名から1985年2,235名へ大幅に増加し、学生懇話室も同時期には、472名から2,332名へと増加の一途を辿っています。そして長期のカウンセリングを必要とする心理的な重度の適応問題に悩む若者が増えたことについて、多くの専門家によって指摘されています（猪木武徳著『大学の反省』NTT出版、2009年、54頁）。

ところが、文学は古来、イメージネーション、創造力、さらにインスピレーションを育むだけでなく、以上のような人間の理性と感情のバランスの問題に対しても、有効な役割を果たし、こころと身体の病まで治療する役割を果たしていました。

人類史上最古の文学理論書『詩学』において、アリストテレスは、いわゆる「カタルシス」という文学の浄化作用の概念を打ち出していました。当時、ギリシアのエピダウロスの円形劇場では、実際、医学の神アスクレピオスを信仰するとともに、芸術の女神をも信仰する聖地だったのです。各地方から患者がエピダウロスにきて、叙事詩、抒情詩、悲劇や喜劇を鑑賞して「カタルシス」の効果によって病気を治していたという。現在でいえば、劇場・シアター・映画館それ自体が患者のサナトリウム・療養所と

なり、文学作品はその治療用の薬になるわけです。ただし、惜しいことに、アリストテレスは「カタルシス」について言及したのが、彼の全著作において、ほんのわずか2か所しかなく、詳しい論究は散逸しています。

現代において、フロイトは、アリストテレスの「カタルシス」の概念を応用し、神経症の患者に言葉を語らせて、その鬱積したものを浄化するという治療効果を求めましたが、その根本のところには、ストーリーを語るといふ物語ることにあります。

中国の最古の医学書『黄帝内経』の「素問」にも、感情を「喜・怒・憂・思・悲・恐・驚」に分類して治療を施す項目がありましたが、それも残念ながら散逸して現在完全なものを読むことはできません。しかしその基本原理に基づいて、養生の一環として感情を配慮し、文学を背景にした読書、琴碁書画という基本的な素養が勧められていました（例えば、名医が文人の患者に薬と共に詩文を送るのは決して珍しくありませんでした）。

これらは、現在でいえば、いずれも人間の精神とこころのバランスをとるという意味において、文学の効果、効用、役割を果たすことを教示しており、人間にとって、起源から文学は欠かすことのできないことを示唆しています。

19世紀イギリスの哲学者、経済学者 J. S. ミル (1806-1873) は、10代頃からすでに19世紀のトップの哲学者、経済学者に肩を並べるような知識と見識をもっていたが、しかし、21歳の時に、「精神の危機」に直面し、意欲の減退と鬱状態に陥ったという。そしてワーズワースなどロマン主義の文学に出会って、その危機を乗り越えましたが、その体験があったことか、晩年1865年、セント・アンドルーズ大学の学長就任講演では、学生に向かってこのように言っています。

科学教育はわれわれに考え方を教え、文学教育はわれわれに思想の表現の仕方を教えると言って何の差支えもないとするならば、その両方を必要としないなどと、どうして言えるのでしょうか。もしそのどちらか一方を欠く人がいたならば、その人は、精神的に貧弱で、片輪な、調和の

とれていない人間性の断片しか持ち合わせていないことになるでしょう。

(中略) 文学には、魂を高揚すると同時に魂を平静にし、高揚した感情のみならず穏やかな感情をも涵養するという偉大な力があります。(中略) 文学はわれわれに真剣に人生を考えさせ、そしてわれわれの前に義務として置かれているものすべてを引き受けさせる素地を与える厳粛な、いわば瞑想的な感情を、われわれの胸底に深く刻み込みます。ダンテやワーズワースの詩、またはルクレティウスの詩やヴェルギリウスの「田園詩」を一通り学んだあとで、あるいはグレーの「哀歌」やシェリーの「知的美に寄せる賛歌」をしみじみと味わったあとで、自分がよりよい人間になったように感じない人が果たしているのでしょうか、と。

(J. S. ミル著、竹内一誠訳『セント・アンドルーズ大学名誉学長就任講演「教育について」』お茶の水書房、1983年、81-82頁)。

ミルは、『論理学体系』、『経済学原理』、『自由論』などを書き、会社に奉職したり、政治家になったりして、生涯にわたって理性を働かせる分野に携わっていたからこそ、「精神の危機」とは何を意味していたかをよく理解していたと思います。言い換えれば、理性と感情の両方が必要であって、一方を欠くなら、その人は精神的に貧弱で、人間性の断片しか持ち合わせていないということを強調して、文学教育の必要性を訴えていたわけです。

概していえば、人間は、バランスをとる必要があります。人文学とは、とりわけ文学とは、ここに自由を与え、イマジネーション、創造力を培う掛け替えのない分野だけでなく、人間の、人生の、理性と感情のバランスをとるのに欠かすことのできない総合的な分野です。その総合性が、現在のグローバリゼーションの時代の必要性に応答できるかと思います。

ただし、あらゆるジャンルの文学、すべての作品が同じ効果があり、そして、さらになんでも勝手に読むさえすれば、精神的、内面世界のバランスが取れるようになるということは保証できません。そこに取捨選択とバランスが必要です。人文学とはその取捨選択とバランスを配慮し、バラン

スがとれた文学教育を施す場所です。それについて、アリストテレスは、その『ニコマコス倫理学』においてすでに言っています。

然るべきときに、然るべきことがらについて、然るべき人に対して、然るべき目的のために、然るべき仕方においてそれを感じずということ、これは「アレテー」（卓越的・優秀的）で、最善である『ニコマコス倫理学』（1106 b 18-23）という。

現代流に言い換えれば、グローバル化の時代に、人間に対して、人間性の復権のため、教育の現場を通じて、みんなのバランスがとれた意識の回復を目指して、人文学の作法で、バランスをとれた人間を感じさせることは、人々にとって最善だということになりましょうか。

つまり、文学とはあるべきとき、あるべきかたちで、あるべき時期に、あるべき読者に、あるべき劇をみせるべきです。

最後に、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災と津波が発生して、全国が悲観的な雰囲気に見舞われていたとき、ある文学の教員（渡辺憲司）は、次のような文学的なエッセイをネット上に送って、文学をもって人々を勇気づけていたことを書き留めてこの講演を終えたいと思います。

2011 年 3 月 11 月以降、世界中の人がテレビに釘付けられ、映像に映ってきた荒波の鉛色の海と、それによって引き起こされた恐怖と悲しみに苦しんでいました。そして日毎に浴びてくる恐怖に満ちた映像とニュースに無防備に晒され、それによって襲われた悲観的な感情、無気力さ、あるいはその逆に無感情、強いては悲しみですら麻痺してしまったところ・感情・内面世界（冷静さを保とうとする我慢の心情）は、一体、どうすればいいだろうかと、いわばこの人知を超えた災害に直面して、人間自身の感情・ところは どう扱うべきか、なす術はなかったという状況でした。

その最中、3 月 16 日、「時に海を見よ」という以下の高校卒業生へのメッセージがネットに送られてきたのです。

(かつて)私の脳裏に浮かんだ海は、真っ青な大海原であった。しかし、今、私の目に浮かぶのは、津波になって荒れ狂い、濁流と化し、数多の人命を奪い、憎んでも憎みきれない憎悪と嫌悪の海である。これから述べることは、あまりに甘く現実と離れた浪漫的まやかしに思えるかもしれない。私は躊躇した。しかし、私は今繰り広げられる悲惨な現実を前にして、どうしても以下のことを述べておきたいと思う。私はこのささやかなメッセージを続けることにした。

(中略)悲惨な現実を前にしても云おう。波の音は、さざ波のような調べでないかもしれない。荒れ狂う鉛色の波の音かもしれない。

時に、孤独を直視せよ。海原の前に一人立て。自分の夢が何であるか。海に向かって問え。(中略)いかなる困難に会おうとも、自己を直視すること以外に道はない。

いかに悲しみの涙の淵に沈もうとも、それを直視することの他に我々にすべはない。

海を見つめ、大海に出よ。嵐にたけり狂っていても海に出よ。

(中略)船出の時が来たのだ。思い出に沈殿するな。未来に向かえ。別れのカウントダウンが始まった。

(渡辺憲司『時に海を見よ』双葉社、2011年、8-13頁)

このタイトルと内容からわかるように、これは敢えて悲劇をもたらした海に直面し、悲劇に向かって、悲しみを希望に変え、清々しいロマン主義的な文学を基底にしたエッセイであろうかと思います。というよりもそれは文学そのものであり、思想・イデオロギー・宗教・体制などを背景にして綴られたものではなく、純粹に文学それ自体のパワーによって悲劇を希望に変えようとした一例であります。非常に短いエッセイでしたが、すぐ「感動的すぎ」、「勇気をもらった」というような大きな反響を呼び、それが全国に広がり、マスコミにも取り上げられました。

人文学とは、とりわけ文学とは、こういう時にも最善を尽くそうとする分野です。

人文学部開設 20 周年記念シンポジウム当日、会場には 100 人近い来場者の姿があった。学部生・院生と教職員はもとより、両学科卒業生や退職教員のご足労もあり、人文学部の新たな一步を踏み出す機会となった。その総括と報告記は、本学「学報」第 95 号（2013 年 9 月 1 日）1，2 面に掲載されており、併せてお読みいただきたい。

以下、当日のパネリスト相互による質疑応答と、会場からの質問を交えた全体討議を手短かに記しておく。

パネリスト相互間での質疑応答

パネリスト 3 氏による「セッション」のあと、安酸敏眞氏の司会により、約 20 分間のパネリスト相互による質疑応答が行われた。

まず、芦名氏から、佐藤・アイトル両氏に、近代とは人類にとってひじょうに強力なシステムであるが、そういうシステムを相対化し、批判をする決め手は見つかりにくい。ついては、そのヒントを教示してほしいという質問があった。

対して、佐藤氏から、「なかなか難しい質問」と前置きがあったうえで、近代というシステムを全く別のものに変えることは不可能だが、さまざまな形でしみが出ているただ中に私たちがいることは紛れもないことである。私たちは、なぜそのようなしみが出ているのか、長いスパンで考える素材を提供することはできるだろうと、看取りの場や国境紛争を例に挙げての回答があった。続けてアイトル氏から、近代は、言語の基礎からあまりにも激しい変化があったが、文学には人の心を癒す役割もあるとし、「3.11」後に話題となったある高校教員のエッセイにもふれた回答があった。

次に、佐藤氏から芦名氏に、リアリティが消えた今日、死にまつわる儀礼の伝承を、「昆虫標本」のようではないどのような形で活かしていけるのか、という質問があった。また、アイトル氏に対しては、現代はツイッターなど言葉があふれている時代だが、逆に言葉の力が失われた時代でもある。

文学にはやはり人を感動させる力があると思うのだが、学問にしてしまうと作文の技術のようになり、文学の最も良い力を消してしまうという分析もある。それについてどうだろうか、という質問があった。

対して、芦名氏から、保存の方法や技術については、近代こそさまざまな可能性を示しているとし、現在変容してきた図書館のあり方にも言及した。そのうえで、保存は、継承する世代に対する配慮も必要だろうという回答があった。アイトル氏からは、日本の小学校から大学までの教育で欠けているのは「イメージネーション教育」や「想像力」であるとし、その力を持っているものこそ文学である、との回答があった。加えて、死と対話することも想像力であり、その想像力が文学作品の中でどう構成されているかを分析することも重要だという回答があった。

次に、アイトル氏から芦名・佐藤両氏に、西洋ではキリスト教学は「神学」の分野に入るが、日本ではなぜ「人文学」の中に入っているのか、という質問があった。また、佐藤氏には、「カミ」とは神々(複数形)のことか、という確認があった。

対して、芦名氏から、キリスト教学は日本の〈哲史文〉(＝哲学・史学・文学)の中では哲学に入るので、人文学的である。しかし西洋では、キリスト教学はやはり神学での専門研究がメインであり、人文学の中に存在するキリスト教学を説明するのに苦労する、との回答があった。しかしながら、近年では世界的にキリスト教学を人文学として研究する可能性も見出し得るという付言もあった。佐藤氏からは、「カミ」は複数形であるという回答があった。

全体討議

10分間の休憩を挟んで、フロアからの質問用紙に対する応答が行われ、より開かれた議論が展開された(司会は引き続き安酸氏による)。

まず、会場質問者A氏(人文学部卒業生)から、資本主義や科学、理性的な発言が尊重されている現代だが、思いやりや文学、感情的な発言などのなし得る役割を考えると、今後の日本のために人文学でこういった研究

を深めてゆけばよいのか、という質問があった。

対して、芦名氏から、「資本主義」に限定しての回答だが、と前置きがあったうえで、資本主義にも近代にも、いろいろな問題があっても軌道修正を巧みにする柔軟な構造がある。人文学は、それなりの軌道修正をする問題提起ができるだろうし、しなくてはならないのではないか、という回答があった。

また、アイトル氏から、人文学は新しい想像学であり、その新しい想像が未来につながるという回答があった。

次に、会場質問者B氏（桑原俊一名誉教授）から、紀元前のシュメールの文化を例に挙げ、死者儀礼を重んずるよりも、むしろ現世を楽しみなさいという文化も存在していたのでは、という質問があった。

対して、佐藤氏から、「たいへん興味深い指摘」という言葉に続けて、古代から江戸時代までの時代ごとの流れが簡潔に例示され、今日は近代を切り離しての発言であったという回答があった。

次に、会場質問者C氏（人文学部生）から、佐藤氏に、領土問題はどのように解決するのがよいと思うか、という質問があった。

対して、佐藤氏から、そもそも近代以前には領土などの発想はなく、たまたま地図や文献に「これはこっちのほうのもの」だと出ていたとしても、近代的な意味での領土とはまったく違う概念であることを、まずきちんと提起しなくてはならないという回答があった。

次に、会場質問者D氏（大石和久人文学部教授）から、セッションで近代の不可逆性という重要な指摘があったが、近代が抱えるさまざまな問題を癒すような新しい文化の誕生を見守ることが新しい人文学の可能性につながるように思う、と述べたうえで、まず佐藤氏に、「ゆるキャラ」のどういう点が現代版のカミなのか、という質問があった。

対して、佐藤氏から、人間同士はあまりにもストレートに向き合うと息苦しい。しかしカミは、それを防ぐようなシステムを持っており、ひじょうに重要な要素だと示した。そして現代、ペットやゆるキャラがそのような役割を果たしているのではないかと述べたうえで、しかしそれ以上の

ことはないという回答があった。

続けて同じD氏から、アイトル氏に、近代文学には写実的で合理性を追求する傾向とともに、シュルレアリスムなど合理性を否定するような動きもあり、コインの表裏のようだったのでは、という質問があった。

対して、アイトル氏から、首肯する質問ではあるが、近代日本では写実主義的な文学のほうが評価が高く、市民権も得てきた。その背景には近代があまりにも実利主義を求めすぎてきたことがある、といくつかの実例を挙げながら、その問題の根深さが回答された。

次に、会場質問者E氏（千葉宣一名誉教授）から、佐藤氏に、本日は折口信夫の民俗学について言及がなかったようだが、という質問があった。また、芦名氏に、現在の京都大学哲学科において西田幾多郎の哲学はどのような状況に置かれているのか、さらに、田辺元の論文に対する反響はどうか、という質問があった。

対して、佐藤氏から、折口信夫や柳田国男や網野善彦らが提起した、カミという存在を歴史の中に取り込む作業はひじょうに重要であり、カミのリアリティを前提とするような歴史学を自分も考えてみたいと思っている、という回答があった。

芦名氏からは、京都大学大学院文学研究科日本哲学史専修の現況が伝えられ、田辺元の研究についても、さまざまな角度から現在もなされているという回答があった。

その後、司会の安酸氏からパネリスト三氏に、本学人文学部生への励ましの言葉及び人文学の可能性を一言ずつお願いしたい、という促しがあった。

対して、まずアイトル氏から、本学の歴代の教授は文学を大事にしてきた。学生たちも、文学・歴史・哲学などにいっそう興味を抱いてほしい、という発言があった。

次に、佐藤氏から、人間とは一体何なのか——この問いかけこそが人文学にとって一番重要な問いであろう、という発言があった。

続けて、芦名氏から、「私たちが人間であるということの問い」を停止し

ない限り，人文学はあり得ざるを得ない。自分や他者に対する関心や興味を，まず大切にしなければならない，という発言があった。

最後に，元文学研究科長大濱徹也氏から，主催者へのねぎらいと人文学部への期待の言葉が述べられ，閉会となった。（文責：田中 綾）